

わが国および諸外国における精神遅滞児の 抽出方法に関する研究

(附) 一国立大学附属養護学校におけるダウン
症候群児の比率の年次別変化

長 畑 正 道
(筑波大学心身障害学系)

I. わが国および諸外国における精神遅滞児の抽出方法について

精神遅滞児の出現頻度を研究するにあたって、その抽出方法が問題となる。抽出法は大別すると2つあり、(1)住民全体を対象とする場合(サンプリング法による場合も含む)と、(2)精神遅滞児の登録制度のある場合に登録された数よりその出現頻度をみる場合、とにわけられる。それぞれに問題があるが、欧米においては後者の方が主流である。

今までの疫学的方法による調査を集計した Abramowicz ら¹⁾ (1975) によると、いずれも登録法による調査が信頼できるとされており、0～19才の小児で IQ 50以下の重度精神遅滞児の頻度は4%であると結論している。その後の研究では Stein ら²⁾ (1976) のオランダにおける19才の男性の徴兵検査による全数調査で IQ 50以下の出現頻度は3.7%としている。しかし Gustavson ら³⁾ (1977) の北部スウェーデンにおける登録児による出現頻度は5～16才の年令で、1959年～1962年生れで5.3%、1963年～1966年で3.4%、1967年～1970年生れで3.1%と逐年低下して来ており、これはダウン症児の出現頻度が低下して来たためとしている。

わが国の重度の精神遅滞児の出現頻度は、1963年に厚生省の行ったサンプリング法による精神衛生実態調査で IQ 50以下は4.2%となっている。

軽度の精神遅滞の出現頻度はいろいろ問題が多い。1967年に文部省が行った小、中学校に在学している児童・生徒の教師による評価では境界児を含め2.07%としている。このうち IQ 50以下は2.01%であるので、軽度のもののみの頻度は1.87%となる。

しかし Hagberg ら⁴⁾ (1981) の最近の研究では、IQ 50～70の軽度精神遅滞児はわずかに0.4%に過ぎない。この理由として、最近の小児では WISC あるいはビネー式の知能検査で一般に IQ が10でいど高く出ることと関連が深いとしている。Stein ら⁵⁾ (1976年) の19才男性の軽度精神遅滞の頻度は Raven 知能検査で5.8%にも達している。Hagberg らの出現頻度はいかにも少なすぎるが、これは登録児より算出した頻度で、最近のようにノーマライゼーションの風潮の高まる中では、とくに軽度の精神遅滞児の登録数が減少して来ていることも考慮に入れておく必要があるのではないかと考えられる。

Ⅱ. 一国立大学附属養護学校におけるダウン

症候群児の比率の年次別変化

昭和38年に幼、小、中、高の各部をもつ精神薄弱養護学校として開設された附属養護学校の児童・生徒の昭和39年度より昭和55年度までのダウン症候群児の比率の変動をみてみた。図1に示すように昭和39年度には僅かに3.3%のダウン症候群児しかみられなかったが、逐年その比率が高まり、昭和47年度には26.4%、昭和55年度には56.6%に達した。全校児童・生徒の平均IQはこれとは逆に昭和39年度では66.3であったのが、昭和47年度には51.4に低下し、昭和55年度には44.9にさらに下がった。この傾向は幼稚部において最も著しく昭和55年度のダウン症候群は83.3%にのぼり、年令の高い高等部ではそれほどでもなく、昭和55年度で31.3%にとどまった。しかし幼稚部に平均IQが40を割るとダウン症候群の頻度がやや低下する傾向がみられた。

ちなみに東京都の公立養護学校におけるダウン症候群の頻度は昭和56年度で152名中13名(8.6%)で、全校児童・生徒の平均IQは16.2と低く、IQがあるていど以上低くなるとダウン症候群の頻度はかえって少なくなるといえる。

養護学校というかなり社会的要因の関与の大きい場でも、モニタリング的観点を導入することで、その背後に生物学的要因がどのように働いているかを推察することも、あるていど可能となるのではないかと推察される。

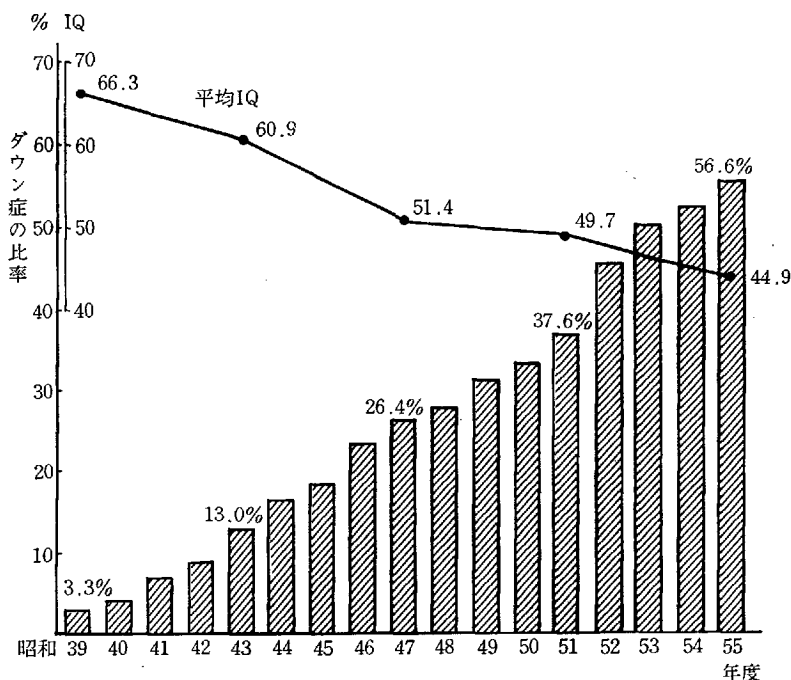
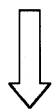


図1 ダウン症の比率と平均IQの推移

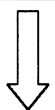
文 献

- 1) Abramowicz, H.K. and Richardson, S.A. : Epidemiology of severe mental retardation in children : Community studies. *Am. J. Ment. Def.*, **80** : 18~39, 1975.
- 2) Stein, Z., Susser, M. and Saenger, G. : Mental retardation in a national population of young men in the Netherlands. I. Prevalence of severe mental retardation. *Am. J. Epidem.*, **103** : 477~485, 1976.
- 3) Gustavson, K.H., Holmgren, G., Jonsell, R. and Son Blomquist, H.K. : Severe mental retardation in children in a Northern Swedish County. *J. Ment. Def. Res.*, **21** : 161~180, 1971.
- 4) Hagberg, B., Hagberg, G., Lewerth, A. and Lindberg, U. : Mild mental retardation in Swedish school children. I. Prevalence. *Acta Paediat. Scand.*, **70** : 441~444, 1981.
- 5) Stein, Z., Susser, M. and Saenger, G. : Mental retardation in a national population of young men in the Netherlands. II. Prevalence of mild mental retardation. *Am. J. Epidem.*, **104** : 159~169, 1976.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



わが国および諸外国における精神遅滞児の抽出方法について

精神遅滞児の出現頻度を研究するにあたって、その抽出方法が問題となる。抽出法は大別すると2つあり、(1)住民全体を対象とする場合(サンプリング法による場合も含む)と、(2)精神遅滞児の登録制度のある場合に登録された数よりその出現頻度をみる場合、とにわけられる。それぞれに問題があるが、欧米においては後者の方が主流である。

今までの疫学的方法による調査を集計した Abramowicz ら(1975)によると、いずれも登録法による調査が信頼できるとされており、0～19才の小児でIQ 50以下の重度精神遅滞児の頻度は4%であると結論している。その後の研究では Stein ら(1976)のオランダにおける19才の男性の徴兵検査による全数調査でIQ 50以下の出現頻度は3.7%としている。しかし Gustavson ら(1977)の北部スウェーデンにおける登録児による出現頻度は5～16才の年令で、1959年～1962年生れで5.3%、1963年～1966年で3.4%、1967年～1970年生れで3.1%と逐年低下して来ており、これはダウン症児の出現頻度が低下して来たためとしている。

わが国の重度の精神遅滞児の出現頻度は、1963年に厚生省の行ったサンプリング法による精神衛生実態調査でIQ 50以下は4.2%となっている。

軽度の精神遅滞の出現頻度はいろいろ問題が多い。1967年に文部省が行った小、中学校に在学している児童・生徒の教師による評価では境界児を含め2.07%としている。このうちIQ 50以下は2.01%であるので、軽度のもののみの頻度は1.87%となる。

しかし Hagberg ら(1981)の最近の研究では、IQ 50～70の軽度精神遅滞児はわずかに0.4%に過ぎない。この理由として、最近の小児ではWISCあるいはビネー式の知能検査で一般にIQが10ていど高く出ることと関連が深いとしている。Stein ら(1976年の19才男性の軽度精神遅滞の頻度はRavcn 知能検査で5.8%にも達している。Hagberg らの出現頻度はいかにも少なすぎるが、これは登録児より算出した頻度で、最近のようにノーマライゼーションの風潮の高まる中では、とくに軽度の精神遅滞児の登録数が減少して来ていることも考慮に入れておく必要があるのではないかと考えられる。